

PROGRAM

弦楽四重奏曲 第15番 ニ短調 K.421 モーツアルト

弦楽四重奏曲 へ長調 ラヴェル

ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44 シューマン

四季のコンサート 春

1990年4月16日(月)6:45PM

浜松市民会館ホール

主催：浜松音楽友の会

「吉井先生の音楽教室」で録音用機器を販売したことから、吉井が音楽家としての活動を始めた。吉井は音楽理論家として、また音楽教育者として、多くの著書を残す。特に「音楽論」（1923年）は、音楽の本質や構成要素について深入りした論述で、音楽理論研究の基礎となる書籍として高く評価される。



室内楽の夕べ ナーダと野島 稔



●モーツアルト:弦楽四重奏曲 第15番 ニ短調 K.421

弦楽四重奏曲は、その純粋な響きによって合奏曲のなかで最高の形式といわれていますが、これを開拓し、一連の作品によってその無限の可能性を示したのはハイドンです。そして、このハイドンから刺激を受け、多くの作品を生み出すなかでさらに洗練させ、次なる完成者のベートーヴェンに受け渡していったのがモーツアルト（1756～1791）でした。

全部で23曲を数える彼の弦楽四重奏曲のなかで、この第15番は1782年から1785年の間にまとめて作曲されハイドンに捧げられた、いわゆる“ハイドン四重奏曲”的一群に含まれています。モーツアルトの作品のなかでは数少ない短調の作品ですが、それらのなかでもっともペシミスティックな情緒をたたえた名曲です。

●ドビュッシー:弦楽四重奏曲 へ長調

ドビュッシーとともに近代フランス音楽を代表するラヴェルは、学生時代に早くも作曲家としてデビューし、有名な「シェヘラザード序曲」や「なき王女のためのパヴァーヌ」などを作曲していますが、それらの作品はなかなか世に認められず、意地になって応募したローマ大賞にもどうしても入賞できませんでした。当時の彼は、エリック・サティの異端的な作風に心酔していましたし、彼の恩師のフォーレもまた型にはまらない自由な教授法をとっていましたので、そうしてはぐくまれた異端的で進取の精神が、保守的な楽壇から反感を買ったものようです。しかし1902年に作曲した初めての室内楽——このへ長調の弦楽四重奏曲によって、ラヴェルはようやくフランス第一級の作曲家として認められ、広く世間の注目を集めることになったのでした。この曲はラヴェルの数少ない室内楽のなかでただ1曲の弦楽四重奏曲であり、失意の時代のラヴェルを励ましつづけてくれた恩師フォーレに捧げされました。

●シューマン:ピアノ五重奏曲 変ホ長調 作品44

ピアノと弦楽器による室内楽はモーツアルトあたりから盛んにつくられるようになりましたが、ロマン派まで含めて、ピアノ五重奏という形式はきわめて少数です。このシューマン（1810～1856）の曲は、ちょうどピアノと弦楽四重奏がひとつになったような編成で、若いころ右手を痛めるまではピアニストになるつもりだったシューマンの作品らしく、ピアノを中心においた作品になっています。しかし、それぞれの楽器のバランスは十分に統制がとられていて、ピアノと弦が織りなすロマンティックな楽想とともに親しみやすい曲となっています。